

《書評》

## 『狐物語』(鈴木覺・福本直之・原野昇訳)

松原秀一

長年待望していた『狐物語』の邦訳である。二段組五百ページを超す大冊であるが、それでも十年以前にこの三人の訳者によって出版された中世フランス語による『狐物語』の約三分の二で全訳ではない。原典に長年親しんできた訳者たちだけにこなれた訳文で楽しく読める翻訳となっている。

日本でのフランス文学の紹介は十九世紀、二十世紀が何といても主であり、中世文学は戦前からのヴィヨンと英訳からの重訳による『オーカッサンとニコレット』物語、昭和十六(一九四一)年板丈緒氏による『ロオランの歌』、幾つかの抒情詩を別にすれば、殆どが戦後の翻訳である。その点で戦前の田辺重治『中世欧州文学』、第二次大戦中創元選書で始めたベディエ・アザールの『フランス文学史』の邦訳は記憶に止めるべきであろう。この文学史は中世編の三冊を出して中絶したが、鈴木信太郎、佐藤輝夫、有永弘人など中世文学研究の第一世代と

いえる専門家が総掛かりで当時最新の中世研究の成果を邦訳したものであった。佐藤輝夫氏が『仏蘭西中世「語りもの」文芸の研究』を白水社から出したのも昭和十六年で、やや小ぶりの版型であったが三百ページに近く、武勲詩の民衆起源を否定したジョゼフ・ベディエの研究をもとに著した日本で最初の中世フランス文学研究のモノグラフィであった。

戦争中にも地道に、バスカル、アラン、モリアック、ヴァレリーなどを出しつつ、『アナトール・フランス長編小説全集』、クランジュ『古代都市』、ラブレエの『ガルガンチュア』を出し戦災に逢い、準備中の『バクタグリユエル』の邦訳を失った白水社は戦後いち早く『仏蘭西古典文庫』に着手してモンテニユの『書簡集』、『旅日記』、ラ・ブリュイエール『人さまざま』、フロベール、スタンダール、ゴッティエなど次々と提供し、他方、ラブレエの邦訳も完結させている。

戦前からフランス文学の紹介に努めてきたこの出版社は数年前から『フランス中世文学集』を著々と刊行しており第四冊目が近々続刊される。新倉俊一、神沢栄三、天沢退二郎の三氏の編訳に依るもので、文学史では必ず触れられながら、邦訳で接することの出来なかった『聖アレクシス伝』、西欧文学にアーサー王の聖杯伝説を導入したクレティアン・ド・トロワの『ランスロ』、『ベルスヴァル』、ヨーロッパ抒情詩の源泉となった南フランスの抒情詩人の数々などを原典からの翻訳で読むことが出来る訳である。こうした自社の専門を大事にする姿勢は大いに評価されるべきであろう。

中世フランス語からの『狐物語』の邦訳は『狐物語』の最も古い部分で、一一七五年頃の作と推定されている第二枝篇と第五枝篇、並びにその少し後で書かれたと思われる第一枝篇がそれぞれ山田爵氏と新倉俊一氏に依って邦訳され、筑摩書房の『世界文学大系』中世文学編(一九六二年刊)に入っている。新倉氏による『狐物語』の第一枝篇『狐の裁判』の邦訳は前述の白水社刊の『フランス中世文学集』第三巻にも再録されている。この邦訳された部分では狐、四十雀、鳥、山猫、狼、熊、獅子から蝸牛などにいたるまでの動物のみが活躍し後に出てくる農民や司祭などの人間は出てこない。しかし話の枠組みはほぼ決まり、『狐物語』の概要は察することができるのであるが、今回の邦訳

に依ってほぼ全貌が初めて明らかにされたといえる。

これまで『狐物語』と言ってきたが、これは単一な物語ではない。大勢の作者に依る作品群なのであって、十二世紀、十三世紀のフランスの学僧たちが一行八音節で二行ずつ韻を踏むという当時の俗語文学の形で、この物語にこそぞって参加した様が窺われる。一番古いと言われる部分が物語の枠を既知のものとして書いているので当時、既に狐と狼の抗争譚がこの物語を作る人たちが、語られるのを聴く人たちの共有財産になっていたことが知られる。動物を主人公とした寓話はイソップ以来の伝統があって広く知られていたのである。

カルル大帝の宮廷に学者として招聘されたアルクインが既に『鶏についての詩』をラテン語で書いているし、十一世紀に書かれたラテン詩 *Gallus et Vulpes* (『鶏と狐』) も残されている。同じ頃トゥール Touil の一学僧が *Ecbasis cujusdam captivi per tropologiam* (『囚人の脱走についての訓話』) という作品で修道院僧たちを動物に譬えた作品を書いているが、『狐物語』にとって重要なのは一一五〇年頃書かれたと推定されている『イセングリムス』 (*Yengrimus*) という六千五百行のラテン詩であり、レイナルドゥスという名の狐とイセングリムスという名の狼の抗争譚で、現存するフランス語最古の『狐物語』とされる第二枝篇と第

五枝篇はこの作品に想を得たと考えられる。フランス語の『狐物語』の狼はイザングランという名であり、狐はルナルルというレイナルドゥスという人間の名のフランス語形であるばかりか、ラテン語の *lupus* に由来する狐をあらわすフランス語 *leoup* はこの狐の名に駆逐されてしまい、今でも狐はフランス語でルナルルと呼ばれている。

『狐物語』はラテン語による各種の『イソップ寓話』の伝統やそれから派生したであろう民話などを踏まえていると言っても、只の模倣ではなく、一味ひねった機知に溢れる作品になっている。それだけ個性的で優れた出来であるので写本にも残され、多くの追隨者が輩出したのもあろう。事実、オランダの中世学者ファン・デン・ボーガルド氏はバリ国立図書館ラテン語写本一六四三八番に残されているラテン語による『イセングリムス訓話』の中に今は失われている枝篇の一行が残されているのを一九七九年に発見しているし、現存する写本以外にも作品はあったであろうことを念頭に置いておかねばならない。

今第二枝篇と第五枝篇の a と分類されているものは、もともと一つの作品だった可能性が強く、イソップ寓話以来の狐が食べ物をくわえた鳥にお世辞をいって歌を歌わせ、落とさせて手に入れる寓話をもとに、狼の留守中に巢で牝狼エルサンに誘われ情を通じた狐が狼夫妻に追わ

れて、逃げながらも、狐の巢に半身はまり込み動けなくなったエルサンを後らから犯した現場を狼イザングランに見つかり裁判沙汰となる事件を扱っている。「裁判」は武勲詩、恋愛物語を問わず中世の人が多大の興味を持った主題であった。

現存する最古の部分を書いたのはピエール・ド・サンクルーという作者であるがこの人物については名前以外は一切分からない。ギリシャ神話をもととした当時の物語や『トリスタン物語』、武勲詩にも通じていたことが窺われ、良く文学に通じた学僧だろうと思われる。イソップ、ファエドロスなどに扱われ、フランスの生徒が必ずといってよい程暗唱させられる十七世紀のラ・フォンテーヌの『狐と鳥』の挿話をこの最古の『狐物語』がどう扱っているかを見て見よう。

『狐物語』では鳥はくわえたチーズを歌ううっかり落とすようなへまはしない。ちゃんと両足で抑えているのであるが、ルナルルのお世辞攻撃で歌に夢中になり片足を挙げたためつい落としてしまうが、ルナルルは落ちたチーズに見向きもせず、怪我をしている足を挙げて見せ、チーズは傷に悪く、匂いも堪らないので退けてくれと懇願し、うかうか信じて舞い降りてきた鳥に飛び掛かる。鳥は数枚の羽を取られたが辛うじて助かる。ルナルルは鶏のシャントクレールにも同じ手を使って歌わせて旨く手に入れる

のだが、犬に追われ鶏をくわえて逃げる途中で今度は同じ手で鶏に騙されるのである。邦訳の第十六話はマルティン版では第四枝篇、ローク版では第二枝篇に当たる、釣瓶で井戸に降り出るのに相手を利用する話でファエドロスにも見られ、『狐物語』では東方説話の多くを西欧に伝えた『デイスキプリナ・クレリカリス』によるものと考えられているが、これも『狐物語』では素直に面白く読める話に加工されている。

この辺りの面白さは今回の邦訳で見ても他はないが、邦訳を読めば、狼イザングランの訴えを聴いて、告訴の取り下げを勧める獅子王の「平和主義」や、自分の妻が寝取られたのか、意に反して犯されたのか腑に落ちないでいるイザングランの可笑しさ、牝狼エルサンのイゾーを思わせる宣誓の申し出、ルナールに好意を持ち、手込めにされてしまう牝ライオンの屈折した思い、また山猫、駱駝、熊など登場する多くの動物たちの描写を通じて当時の人間の社会が透けて見え、同じ頃の武勲詩やロマンスのパロディーにもなっていることが理解されよう。動物たちは獅子王の宮廷で掛け引きもあり、偽善もある生活をしている。ひとり偽善のマスクをかぶらないのがルナールであり、これに純愛を捧げる妻エルムリーヌである。そのエルムリーヌもルナールが死んだという噂を聴くと早速穴熊のボンセと再婚する気になり、染物の桶に落ちて色が変わりこれ幸いと旅楽士に変装したル

ナールに仕返しされる。ルナールは自分より弱いものに騙されることもあれば、好敵手山猫や熊と秘術を尽くして闘いもする。せっぱ詰まれば獅子王ノールを平手打ちで打ち倒しもするが、そのルナールが捕らえられるのは何と獅子軍の旗持ち蝸牛のタルディフ(のろま)の目ざましい武勲による。

最初の枝篇は直ぐに好評を博したと見え、追隨者がぞくぞくと出て、各種の挿話を付け加えていった。それらは中世以来「枝篇」と名付けられ、やがてそれらを纏めた写本が十三世紀になると作られてゆく。現在、主な写本が十四、断片的に『狐物語』を伝える写本が十九残されている(断片の一つは広島大学にもあり、発見順からしとして知られる)。これらの写本はその伝承振りから三つのグループに分かれるが、その他このグループに分類しにくい三写本もあり、その内の一つバリ・アルスナル図書館にある写本によって『ブレイヤード叢書』に校訂版が作成中であるという話である。

ビエール・ド・サンクルーに続いて書かれたと推定される第一枝篇には挿話的に染物屋が現れ、その後書かれる挿話には僧侶や農民などが姿を現すようになる。ビエール・ド・サンクルーの作品は一一七五年頃書かれたと推定されているが、四、五年も経たぬ内にハインリッヒ・グリヒェツァーレが六つ程の枝篇を中世ドイツ語に訳した。これが『ライネッケ・フックス』

で後にゲーテが利用することとなり、又、明治十七年には井上勲によって『<sup>歌集</sup>狐の裁判』として日本に紹介されている。グリヒェツァーレの作品は翻訳というよりは当時の『狐物語』を彼なりに編纂したものと考えるべきとされている。原典にはビエール・ド・サンクルー以前の今は失われた枝篇があったと考える学者もある。グリヒェツァーレの『ライネッケ・フックス』を校訂出版したのは十九世紀初頭の碩学グリムであり、ゲルマン民族の口承文学起源と考えた。これを継承したレオポルド・スュドルの著書は後にリュシヤン・フリーレによって徹底的に批判されることとなる。

『狐物語』は八音節で書かれた文学としては早い作品である。十音節で書かれた武勲詩も八音節の多くの物語も中世後期になると散文化されるのであるが『狐物語』はフランスでは散文にならず、十四世紀に至ってもこの詩型で社会批判性の強い作品が書かれたが、散文による『狐物語』が書かれることはなかった。これは『狐物語』が枝篇の集まりであって、ロマンスの整合性を持たないことによるのであろう。十三世紀には『狐物語』の詩形をかりて当時の托鉢修道会を批判する『逆説ルナール』がリュートプフによって書かれ、ジャクマール・ジェレの『新編狐物語』に継承される。十四世紀には六万行の大作『狐に化けて』がジャン・レヴィンエ・ド・ドロワによって書かれ、ルナールが偽

善に満ちた世相を暴いて行くというように痛烈な諷刺に向かっているが、元の『狐物語』は面白からせることを目し現実の滑稽や偽善をそのままに捉え、貴族も女性も裁判も聖書の奇跡も理想化しない点でフアブリオーに通ずる。

当時の学僧には庶民階級を出自とするものも多かったので、農民や庄屋の生活などが如実に描かれているのも魅力の一つである。中世フランス語の『狐物語』はフランス革命を迎える十年前にルグラン・ドスィーによって掘り起こされるまで、三百年程忘れ去られていた。一八二六年にメオンは『狐物語』を四巻本として刊行しこれが契機となって、十八世紀にベネディクト派の学僧によって始められ、フランス学士院が引き継ぎ、今日も続刊されている『フランス文学史』の第二十二巻でフォーリエルによって一八五三年に取り上げられている。この『狐物語』論についてはサント・ブーズが二回に亘ってモニトゥール誌に書評を寄せている。この書評は後に『月曜閑談』の第八巻に再録されているが、これも昭和十七年にシヨウヴォーの現代フランス語訳に主として『狐物語』を翻訳した水谷謙三氏によって邦訳されている。

群の六写本の伝承をパリ国立図書館写本部、フランス語写本二〇〇四三番を底本として刊行した。三つの群中最も多くは枝篇を含むベータ群は三写本と断片二つで構成されるが、第一次大戦後、それまで主流であった文献学のラハママン校訂法に対するジョゼフ・ベディエの批判によって写本校訂に対する考えかたが変わったこともあり、選んだ底写本を出来るだけ尊重する趣旨で一九四八年からマリオ・ロークがカンジェ写本と呼ばれる、十八世紀のシャートル・ド・カンジェ所蔵だった写本の一つで現パリ国立図書館フランス語写本三七一番を底本に刊行を始め、近刊される一冊を残して六冊が既刊である。

ガンマ群写本は『狐物語』をルナルの誕生から死まで順序を追って編集した写本であり、中世に於ける校訂版の感がある。この群の写本の一つ、パリ国立図書館フランス語写本一五七九番が一八二六年のメオン版の『狐物語』の底本であるが、当時のことで底写本に忠実に従う考えは無く、祖型を求めてパリ国立図書館にある『狐物語』の主な写本からいろいろ読みを採用しているため、ガンマ群の校訂版と言うわけにはいかないものであり、この写本群だけが校訂から取り残されていた。

『狐物語』は中世文学を論ずる場合にともしれば忘れがらにされる盲点を意識させる作品群で、特にグリム以来のゲルマン民族の民話起源論かラテン文学の書物の伝承による作品かは論

争の的であった。しかしそれぞれの写本群の正確な校訂版無しでは議論にならないことも認識されていた。グリムのゲルマン民話起源論はフランスではレオポルド・スュドルに補強されたが、リュシヤン・フーレによって一九一四年の著書で徹底的に批判され、中世のラテン文学の伝統に親炙していた学僧たちの作品であると論じられた。このフーレに『狐物語』は一つの作品ではない。二十八あるのだ」と嘆じさせた作品群では写本群の相互関係、写本同士の関係が輻輳を極めていて、なによりも先ず各群の正確な校訂版の作成が待ち望まれていた。ガンマ群の校訂という残された大きな仕事に取り掛かったのがフランス政府留学生として一九六七年にフランスに渡り国立高等研究学院(Colege de laque des Hautes Etudes)プレオン・ワグネル教授の指導を受けた広島大学の原野昇氏と創価大学の福本直之氏の二人であった。二人はそれぞれ『狐物語』のガンマグループの二写本を対照にそれぞれ第九枝篇、第一枝篇の研究と校訂でパリ大学に博士論文を提出、一九七〇年に博士号を取得し、帰国後もガンマグループの全枝篇に研究を拡げ、同じ時期にフランス政府留学生としてパリ大学で学んだ愛知県立大学の鈴木寛氏の協力を得てフランス図書からガンマ群写本による『狐物語』の校訂版二巻を一九八三、八五年に出版したのであった。これは大きな反響を呼びフランス、ドイツ、イタリアなど

の名だたる中世研究誌が書評に取り上げるところとなった。したがって今回の邦訳は訳者がじかに十三、十四世紀の写本に長年親しんできている点でも珍しいものである。内容の精密さも言うまでもないが造本も称賛され、ロマンス言語学会の機関紙 *Revue de linguistique romane* の一九八五年号に細字で三頁にわたる書評を書いたジル・ロック氏は「完璧な成功で、あらゆる『狐物語』研究者に欠くことが出来ない版」とした後で「我々の先祖の残して呉れた文学的遺産を刊行する人たちは旭日帝國のフランス語の同僚たちを見習って欲しいものだ」とまで言っている。

事実この版はマルティン版、ロック版との枝篇の対照表から語彙集、中世研究者必携のボッシュアの書誌の千ページを越える第三補逸の四六四ページで本文中に「大変に充実した」と特記されている書誌を含む行き届いたもので、今回の邦訳はそうした原典校訂の十年を越える基礎作業の上になされたものである。なお、この校訂版とそれ以前の福本氏の仏文の博士論文などの出版を敢えて引受けたフランス図書義侠心も称賛に値する。

案しくも読め原典の理解にも役立つ今回の邦訳には長年親しんだ馴れもあって固有名詞に漢字を宛て振り仮名を振るといった遊び(たとえば蕪山村<sup>フウヤマウラ</sup>)も見えるが、案外この方法は隠喩を翻訳するには便利だと思わせる箇所もあった。

注がやたらに無いのもエンターテインメントを旨指している原作に相応しいのかもしれない。

兵士の歌うカンティレーナから武勲詩が生じたという民間起源説とベディエ以来の武勲詩の修道院起源説の応酬から武勲詩を対象とする国際レンセスヴァル学会が生まれ、アーサー王ロマンスのケルト起源説論争を巡って国際アーサー王学会が生まれたように、『狐物語』もグラスゴウ大学のケネス・ヴァーティ教授の提唱で一九七二年に「国際動物叙事詩学会」通称レイナード・ソサイエティ、ソシエテ・ルナルディエヌヌが造られ、一九七五年以来二年置きにヨーロッパで国際学会が開かれていた。福本氏、

原野氏、鈴木氏の参加はいつも重要視され、一九九三年の総会では七月初旬に開いてはこの三人が来られないから次回に開いては日本の大学の休暇を考慮に入れて会期を決めるべきだと議長が発言する程であった。学会発表論文は必ず刊行されていたが、一九八七年のダラムの学会から機関誌として『レナルデュス』(Reinardus)が年一回刊行されるようになり既に七冊になろうとしている。三氏による原典の刊行から日本で国際学会を開くことも要望されていた。毎回断り続けていたものの、断り切れなくなつて恒例の国際学会の間の年ということで今年の七月末には慶應義塾大学で小規模であるが臨時学会が開かれ、アフリカを含む各国の学者が来日する。この機会に出来るだけ多くの識者にこの優れた邦

訳を楽しんで頂きたいものである。『狐物語』については三氏の共著による『狐物語の世界』(東京書籍刊)があったが絶版になったままであることも惜しまれる。

なお『中世文学集』もそうであるが、今回の邦訳の定価が五千円を超えるのは一般の読者を近づけるものではないのか。一考を願いたいものである。

(白水社、四六判、五〇六頁、五八〇〇円)

\*

季刊 第7巻・第2号

1996  
春

# 文学

〈特集〉 = 中世末の創造

- 《鼎談》 中世の秋 ..... 松岡心平・新倉俊一・戸口幸策  
西から東へ ..... 久保田 淳  
——文明 17, 18 年における詩人・文人達——  
幽玄が円寂するとき ..... 松岡心平  
——一休・禪竹の世界——  
室町末期の能と観客 ..... 山中玲子  
忘れられた橋 ..... 藤原良章  
中世の歌謡<sup>シャンソンの</sup>は古い小唄か? ..... ミシェル・ザンク  
【文学のひろば】 ..... 齋藤ゆかり・井上修一・粟津則雄

岩波書店